

異文化理解の一事例：ユーロメッド・マルセイユ（仏）における授業展開

A Study of the Way to Understand a Foreign Culture: a case study of international lecturers held at Euromed Marseille Business School in France in 2007

足 立 基 浩 ・ 菊 谷 和 宏
Adachi, Motohiro & Kikutani, Kazuhiro

ABSTRACT

This paper examines international seminars held in the “Euromed Marseille Ecole de Management” (i.e. a business school) in Marseilles, France on November 2007, where the author joined as a lecturer member of staff, with special reference to the adoption of foreign culture. Firstly, a general understanding of an international seminar is given and secondly the author, as a lecturer, shows how the international lecture entitled “Japanese Land and Property Market and Management”, was conducted over five consecutive days (i.e. an intensive international course). Finally the paper explores future perspectives concerning the understanding of international exchanges and foreign culture.

はじめ⁽¹⁾に

現代社会の多くの領域で「国際化」「グローバル化」などと叫ばれて久しい。しかし、実際のところ、「異質な他者」の最たるものである「異文化」の理解はどのようにおこなわれるのか？ 遠く隔たった異文化との相互理解がありうるとすれば、それはどのようなものになるのか？

(1) 執筆者名の表記順は五十音順である。執筆分担は以下の通り。足立基浩＝第2節、菊谷和宏＝はじめに・第1節・おわりに。

本稿は、今後この問いを深く追究するための一つの事例として、2007年11月に実施された足立基浩和歌山大学経済学部准教授による海外での授業——フランスで、日本人が、英語で、フランス人学生のみならず多くの留学生に対して授業をおこなったという、現在のところ希有な事例であるが今後一般化するであろう多文化交流事例——を報告し、将来の考察に供するものである。

第1節 授業の位置付け——授業を取り巻く環境と条件

2007年11月6日から18日の約2週間に渡って、足立基浩准教授と菊谷和宏准教授（当時・現教授）で和歌山大学の海外交流協定校であるユーロメッド・マルセイユ・マネジメントスクール（Euromed Marseille Ecole de Management：以下、ユーロメッドと略す）を訪問した。多彩で多量の仕事と成果を持つこの訪問の中から本稿が扱う足立准教授の授業は、「日本の土地市場と不動産経営」をテーマとして、12日から16日の5日間に渡り実施された。本節では、その実際を次節で具体的に見る前提として、授業を取り巻く環境と条件を概観し、もってこの授業の位置付けを明確にしようと思う。



まずはユーロメッドという学校について説明することから始めよう。

現在ユーロメッドと和歌山大学との間には、数多くの項目が含まれた包括的な交流協定が結ばれている。この協定は、2006年9月に菊谷がおこなった現地

調査とそれに続く具体的な交渉および協定案作成作業を経て、同年12月に締結されたものである。⁽²⁾

ユーロメッドは、大学（ユニヴェルシテ université）ではない。大学とは異なるフランス独自の高等教育機関グランドゼコール（Grandes Ecoles）の一つである。他国に類を見ないこのグランドゼコールというシステムを正確に評価することはなかなか難しいが、差し当たりここでは、大学院大学のようなものと考えていただければ良いだろう（詳しい説明は後述）。その中でもユーロメッドは、70校程度存在する経営系グランドゼコールのうち現在ランキング9位と、かなりの上位校である。

学校の規模は、専任教員数約60人、総学生数約2,200人と比較的小規模である。おおまかには単科大学を思い描くと良いだろう。ただし、単科大学のこぢんまりとしたイメージとは裏腹に、ユーロメッドは現時点で30カ国以上の大学との間に100近い国際交流協定を締結しており、また学生には海外留学を必修科目として課すなど、量的にも質的にも非常に多様で活発な国際的交流を積極



(2) 菊谷和宏、「ユーロメッド・マルセイユ・マネジメントスクール紹介～交流協定締結交渉・調査を終えて～」，和歌山大学国際教育研究センター年報第3号，pp.25-28，2007.3を参照されたい。また，本稿で詳述する交換授業以外の交流については，菊谷和宏，「ユーロメッド・マルセイユ・マネジメントスクールとの交流報告 2007～交換授業，留学生活，共同研究～」，和歌山大学国際教育研究センター年報第4号，pp.33-36，2008.3をご覧いただきたい。

的に推し進めている教育研究機関である。

なお、この学校の設置運営母体はマルセイユ・プロヴァンス商工会議所（CCIMP: Chambre de Commerce et Industrie Marseille-Provence）であり、また多くの私企業の積極的な支援を受けている。しかるに、フランスの商工会議所は国立の組織であり、ユーロメッドを「私立」学校と呼ぶことはできないだろう。むしろ「事実上の国立」と考えるのが適切であると思われる。

さて、“Japanese land & property market and management” と題された今回の足立准教授による講義は、このユーロメッドと和歌山大学との協定に含まれている交換授業の一環として、また同時にユーロメッドが主催する国際セミナーの一環として開かれた。このセミナーは、学部ではなく大学院修士に当たる課程の学生を対象として毎年開講されるもので、講師は毎回世界中から集められている。今回の場合、近くはオランダ、遠くはチリ、珍しいところではマルタ、そして日本から、総勢8名の専門家が参集した。

講義は毎日午前3時間＋午後3時間、合計30時間の集中講義形式で実施された。日本の大学の半期2単位分＝22.5時間の1.5倍近い授業時間数を月曜から金曜までの連続するわずか5日間でおこなったわけであり、講師にとっても学生にとっても極めてハードな授業であった。一クラスの参加学生定員は60人、



ロビーに設置の案内スクリーンに表示された足立准教授の講義情報。学内で開催・予定されている講義・講演会等の情報が、各所に設置されたスクリーンで常に流されている。

足立准教授の講義には 53 人の学生が登録した。

なお、講義中の使用言語はフランス語ではなく英語とされた。これは他の講師も同様である。もともとユーロメッドは留学生を大量に受け入れており、全授業の約半数は英語で実施されていることから、このこと自体はさして特別なことではない。しかし、このセミナーは履修規定上の必修科目に指定されており、普段はフランス語の授業をやはり多く受講しがちなフランス人学生にとっては、卒業のためにはどうしても避けて通れない、（苦手な？）外国語での授業となっていた。そのような事情もあってか、フランス人学生も留学生も、受講生は皆真剣であった。

最後に、次節で授業の実際を見る前に頭に入れておくべき重要な要素が一つある。それは、グランドゼコールと大学の異同だ。これは、フランスと日本の異同ではない。フランスにも大学は存在する。そうではなく、高等教育システムにおける大学とグランドゼコールの質的な違いである。⁽³⁾

この問題を詳細に追うことは明らかに本稿の主旨から外れてしまうため、ここではごく簡単に、次節に関係する範囲での説明にとどめるが、フランスの（と言うよりもヨーロッパの）大学というものは、その起源を 11～13 世紀に持つある種中世的な「結社」である。そこでは（当時の）医学、法学、そして神学など、近代国家の目から見れば「古びた形而上学」が、別言すれば純粋な学問が論じられていた。

対してグランドゼコールと呼ばれる学校群は、おおよそ 18 世紀末、多くはフランス革命前後に設立されている。そこでは、革命の気運すなわち君主政を廃し共和国としてフランスを新生するという時代の使命を背景に、近代国家の形成に必要な、理工系を始めとする実践的な研究教育が一貫して志向されてきた。グランドゼコールが日本で時に「高等職業専門学校」と訳されるゆえんである。

(3) 『『大学』よりもはるかにステイタスの高い教育機関である『グランドゼコール』』との理解が日本では頻繁に見られるが、これは極めて不正確な理解である。両者は質的に異なる教育研究システムであり、またそれぞれの内部には様々な水準の学校が存在する。単純な比較は意味を成さない。

要するに、大学が本質的に純粹な学問の場であるのに対し、グランドゼコールは実学^①の場である。ただし、日本で今日考えられている意味での「実学」ではないことに注意が必要だ。日本ではおよそ学とは別のもの、つまり実践・技術の習得、つまりは単なる職業技術訓練を「実学」と言い換えてきた。しかし、グランドゼコールで考えられまた実際おこなわれている実学はそのようなものではない。それはあくまで学（問）であり、技術の習得よりもずっと理論や倫理が重視される。この意味では、グランドゼコールという実学とは、大学で中世以来講じられてきた「（無論、揶揄的表現としての）形而上学ではない」との意味であり、あくまで学問の範囲内にある。したがって、学生に求められるものは、卒業後上級官僚や管理職など社会の指導的立場につきその任を果たしうる能力の涵養であって、現場労働者に要求される諸能力、例えば販売技術や工作技術は教育上重視されていない。むしろ、指導者層に不可欠の倫理や原理・原則、そして理論が重点的に教育される。こうした内容を多くのケース・スタディを通じて具体的に教育することこそが、実学^②と呼ばれているのだ。

この質的相違点に留意しつつ、次節でグランドゼコールの授業の実際を見てみよう。

第2節 授業の実際

1. IT化が進む授業体系

以下、授業内容やシステム、また教員に対する授業評価などについてできる限り詳細に示そうと思う。

最初に特筆したい点はユーロメッドの授業、また様々な告知等の連絡手段において、IT化が極めて進んでいるということである。例えば、授業中学生のほぼ全員がノートパソコンを持参して、私（本節では私＝足立とする）の発言などについて文書を作成している。

（4）ここにフランス伝統のエリート主義を見て取ることはもちろん可能であろうし、グランドゼコールが「高等」とされる特殊な意味もここで理解されよう。

授業前の課題や資料についても、ほとんどが電子情報化されている。学生たちは授業を受ける前にホームページからそれらの情報をダウンロードしており、紙媒体にコピーしている。つまり、教員が授業中もしくは事前に資料を配布するなどということはここには存在しない。このシステムにおいては、紙資源は基本的に必要とされない。極めて環境に優しい授業形態と言える。

また、学生のノートパソコンだが、全員が IBM のものを使用していた。これは、この大学院の経営主体が商工会議所である点と関連している。つまり、そのメンバー企業（つまり、IBM）と商工会議所との交渉の中で導入に至ったものと推察される。自分の好みの機種を選べないという課題はあるものの、特定のパソコンを使用することによりプロジェクトを始め関連機材との互換性が高まり、より一層の効率的な授業・研究活動が可能となる。ちなみに、教員からの指示により学生たちはネットを使った検索を即時におこなうことができる（現在のニューヨーク市場の平均株価など）。授業内容（質疑応答）もこれに関連し、即時性の高いものになっている。

さらに、私のような短期の客員教員にもパスワード等が与えられ、総じて「IT化が相当に進んだ授業を展開している」との印象を受けた。

2. 授業のスタートと時間割

次に、実際におこなわれた国際セミナー（International Seminar）の時間割などについて説明したい。

私は「Japanese land & property market and management（日本の不動産市場と経営）」というタイトルで授業をおこなった。当初ユーロメッドより依頼があった際には「Japan's land market」とのタイトルにしていた。しかし、MBA コースということもあり、先方から「経営学的な要素を入れて欲しい」と要請があったため、末尾に management の語が入ることとなった。

時間は初日のみ午前 11 時スタート、午後 5 時までの 4 時間授業（正午から午後 2 時まで昼休み）、2 日目からは午前 9 時から午後 5 時までの合計 6 時間授業

[illegible]

図 1 授業の教室番号と時間割

1 ユニット（一つの授業時間）は3時間でその間に20分ほど休憩時間を入れることができるが、一日6時間の講義というのは、個人的には長いものに感じた。

学生にとってはもちろん、日本国内でもこれほどまでのハードスケジュールで集中講義をおこなった経験がない私にとってもかなりきついものであったものの、昼休みや休み時間でのちょっとした学生との雑談のおかげでなんとか乗り切ることができたように思う。

3. 授業の進め方

かつて私がケンブリッジ大学の大学院生だった頃を思い出し、その時の教授陣が採用していた手法を踏襲した。それは授業内容の全体構造を説明し、その後各論についてディスカッション等を含んだ授業を展開するというものである。

海外では「学生にわかりやすく解説する」という授業形態だけでは不十分で、特に「学生が（応用問題なども）できる」まで徹底した教育がおこなわれる傾向

	午前9時～ 10時30分	午前10時30分 ～12時	午後2時～3時30分	午後3時30分～5時
月曜日	ガイダンス （教員向け）	イントロダク ション	日本経済のガイダンス	日本の土地税制
火曜日	収益還元法	投資のタイミ ング理論	アフォーダビリティ問 題	討論（住宅補助政策の 正当性）
水曜日	住宅市場1	住宅市場2	ヘッドニッケ法	討論（中心市街地活性化）
木曜日	リアルオブ ション1 理論	リアルオブシ ョン2	不動産投資信託市場	討論（一極集中について）
金曜日	不動産マネ ジメント全般	復習	地方都市の活性化について	テスト

表 1 Japanese land & property market and management の授業内容

向にある。

ユーロメッドでは、約 50 人の学生を 7 つの班に分け、午後 3 時半までは通常のレクチャー、そしてそれ以降の授業についてはテーマを決めてディスカッションを実施した（表 1 参照）。

例えば、フランスでは基本的に日曜日は休息日にあたり、観光客用の飲食店を除きすべての店が閉店しているが、この点について経済活性化と伝統文化の保全の観点から賛成派と反対派（favor, against）に分かれて議論をおこなった。



実際の授業の様子

この議論は個人的にも大変興味があった。

また、日本には都市部に大量の市街化区域内農地が存在するのだが、このことのメリットとデメリット、そして個人的研究からも強い関心を持っている「地方都市の中心市街地の活性化と郊外型小売店舗の進出」などについて、事前に資料を集めさせて議論をおこなった。

つまり、午前中の3時間は不動産市場に関する一般的な事項の紹介を、また午後の前半部分は数式を用いた基礎理論の紹介をおこない、午後3時半からはそれらを踏まえた上で討論を毎日実施した。

4. 学生の授業態度等

学生たちの授業態度はすこぶる良かった。たまに話をしている学生もいたが、恐らく授業に関するものであり、気にはならなかった。

また、授業の間にかかなりの学生たちと話をできたことも良かったと思う。担当クラスの学生たちの国籍は約8割がフランスであり、そのほかはアメリカ（1人）・ブラジル（3人）・中国（3人）・インド（2人）・その他、となっている。

ほぼ全員が毎回出席をしており、休む場合にはしっかり事前連絡があった。また通院による欠席の際には診断書を持参してきた。この授業の出席が卒業単位取得のための必須条件であることは、周知徹底されているのである（ユーロメッド側の方針）。

また、最終日に試験をおこなうか否かについては迷ったが、結局実施することとした。その時には若干学生からクレームが出たが、結果として皆良好な成績を残した点を鑑みると、彼らもかなり真剣に試験準備にとりくんだようである（平均点80点程度）。

質問は随時出ており、その都度答える形式をとった。学生の質問で一番多かったのは理論的なもの（不確実性下の経営に関するリアルオプション理論、収益還元理論や割引率の意味）であり、その他に日本の文化などに関するものもあった。



授業中の学生の様子（中央やや左で立っているのが著者）

文化面の質問は、例えば柔道に関するものがあつた。女子学生の一人 Aurelie さんはフランスで柔道の黒帯を取得しており、日本のスポーツ文化に対して大変関心があるようだった。その他、漫画を始め日本特有のものには特に興味を示していた。授業の随所で、和歌山県に関する紹介をおこなったところ、10人ほどが「来年、日本（和歌山）に行きたい」とのことであつた。

5. 国際セミナー授業担当教員との関係

私はマルセイユ市内のホテルに滞在していたが、このホテルの近くに滞在しており、同じく招聘教授として授業を担当した Dardo de Vecchi パリ第7大学教授とともにユーロメッドが手配したミニバスを利用して通勤した（ホテルとユーロメッドは距離にして約 5km）。

その他合計 8 人の教授陣とバスで一緒だったが、次第に親しくなり、昼食・夕食を共にするようになった。それぞれの専門分野が異なるために話は盛り上がり、経営哲学がご専門のマルタ大学経営学研究科 Sandra Dingli 教授とは白熱した議論を交わした。

例えば、経済学において「時間の概念」は様々な価値に影響を与える機能を

持っている。割引率や利子率などがその代表例である。Sandra氏は、エマニュエル・カントの「それは [=時間とは] 認識に他ならない (it is consciousness)」との言葉を引用し、「時間の存在」について哲学の分野から興味深い示唆をいただいた。この考え方は同行の菊谷准教授からの補足を経て、私の専門分野である「地理的空間の把握」の理解にも役立った。

その他、フランスのトゥールーズ地区でビジネスを営む会社社長 (Leandoro de Sa氏) なども招聘教授であり、同氏からはヨーロッパ経営学の最新事情について多くの示唆を得た。

学生との交流はもちろん、こういった幅の広い学問分野を持つ教授陣との議論を通じて本当の意味での国際交流を体感できたように思う。

彼らは同僚であり構える必要もない。日本で通用する議論や説明の仕方などはその9割が他の国でも通じるとして良い。無論、文化や伝統がもたらす差異は否めないが、対等に議論をすることが真の国際交流に繋がるのだということをも身をもって感じた。

なお、それぞれのメンバー8人が自国の経済や地方都市のことを熱く語っていた (もちろん私は地元和歌山の魅力と活性化について熱を入れて語った)。地方のことを知り、世界を知るというグローバルの真の意味がここにあるように



国際セミナー講師陣とスタッフ

思う。

6. 成績と授業評価

次に学生達の成績と講師に対する授業評価について見てみたい。

ユーロメッドの国際セミナー担当事務官の Emmanuelle Mebratu 氏から当初、成績をつける際には授業態度や試験での点数等を考慮して総合的に判断して欲しい、との依頼があった。

試験については、最終日（11月16日）にこれを実施し試験時間は60分であった。先述のように、（学生が頑張ったせいかな）点数は極めて良く、その他出席や授業態度等を加味して最終的な点数とした。

なお、興味深いのが同校で利用した指定解答用紙である。図2を参照していただければわかるが、解答用紙で学生の氏名を書く項目が隠されるようになっていた（右上の部分を折りたたんで糊付けする。糊は上部に存在し、切手のように湿らせれば付着する）。これは、先生がひいきの学生の名前を見てその学生の点数を高くすることを防ぐためである。



	数値
平均点	78.77
中央値 (メジアン)	75.00
最頻値 (モード)	65.00
標準偏差	9.88
点数	89.88
標準数	88.00

表2 成績の基礎統計量

図2 試験解答用紙（右上の名前の欄を伏せて提出）

階で評価されていた。

図3の評価結果が示すように、項目ごとに3.8から4点台中盤という成績をいただいた。他の教員との比較資料がないためこの点数の水準がどのレベルのものか判断しようがないが、一般的に8割以上の得点は「良」の水準に値するわけであり、まずまずの評価をいただくことができたように思う。

8. 授業を通じて

今回ユーロメッドでの集中講義を終えての最初の感想は、やはり30時間の集中講義は体力的につらいものの、学生の熱心さに押されて良い経験をさせていただいた。また、世界の第一線で活躍する各国の教授陣との交流も新鮮であった。さらに、個人的な研究対象（テーマ）について学生の意見を拾えるというメリットもあり、この点自らの研究テーマに役立ったように思う。その後、日本に留学したいという学生からメールもあり、和歌山大学の宣伝にも一役買えたことを考えれば、総じて良かったように思う。

他方、いくつかの課題もあった。

第一に、今回の授業は全くのボランティアでおこなわれた（所属大学からの授業の負担減少や特別手当などのようなものは一切ない）。つまり、30時間の授業準備、現地での授業やその他質問の受付などは担当となった教員の負担としてすべてのしかかってくる。今後良好なシステム設計を考えれば、これらの負担を個人のものとはせずに、なんらかの軽減措置をとった方が良い。そうでなければ教員の教育交流などを含む持続的な提携は難しいであろう。

第二に、この関係を発展させてゆくには交流担当の事務専門官が必要である。国際交流には、多くの時間を費やす。専門的なコミュニケーション能力が必要である。海外との時差等も考慮して交渉を継続するには、そのための専門官を雇うもしくは職務の内部化を試みる必要がある。今回は菊谷准教授の献身的な交渉により提携にこぎつけたが、今後は同氏の個人的負担に甘えていられない。システム的な改善が必要であろう。これは、日本国内の多くの大学が苦手とし

ているところと思われる。

第三に、学生の相互留学のメリットを図る必要がある。英米圏と異なりフランスというヨーロッパ大陸文化の一角を占める提携をおこなったことは、貴重であり大変有意義なものである。学生を定期的に英語圏以外の国に留学させるメリットは大きいので、この点を考えた総合的な研修システムを構築したい。

おわりに

以上、ユーロメッド・マルセイユでの授業展開について、これを取り巻く環境と条件も含め紙幅の許す限り具体的に見てきた。今回の経験を踏まえた上で、三つの課題も提起した。一事例報告としてはこれで十分であろう。

しかし筆を置く前に、今後の国際交流の展望として、かつまた異文化理解という本稿冒頭に掲げた根源的な問い追究の準備としても、以下ごく簡単にではあるが二点指摘したい。

第一に指摘すべきは、国際交流というものの複雑さ、ある種の「えたいの知れなさ」、無定型性である。

今回の例で言えば、国際セミナーという紛れもない「授業」であってさえ、このプロジェクト全体から得られたものは、講師から学生への単なる知識の伝達ではもちろんなく、そもそも講師と学生の関係のみにあるのでさえなかった。授業・教育という表題に囚われそこにのみ目を向けるのでは、国際交流の豊穡さを見落とすこととなろう。

例えば、前節で見た通り講師相互の交流からも豊かな実りがもたらされた。セミナー期間の終了とともに基本的には終了する講師－学生の関係よりも、もしかすると、この講師陣の交流こそ——世界に散らばったそれぞれの本務校で忙しく通常はなかなか会おう機会も持てない講師たちによる face to face の交流こそ——長い目で見れば、国際セミナーの主目的とさえ言うかもしれない。事実、足立准教授はセミナー終了後現在に至るまで、他の講師との緊密なコンタクトを保っている。

そもそも、今回のような多文化混合状態のプロジェクトは、参加者それぞれが背負う文化的規範や自明性が質的に異なる以上、目的の限定された合理的活動は、実際のところ単純に達成されることなどありえないのだ。国際交流の実際は予定外・予想外の事態の連続であり、このことはこれに携わった経験のある者なら皆よく知っていることである。異文化交流の現場では、表立って掲げられた目的の周辺に、実質的な目的や成果が、予測不能な創造をもって、ある種の偶然をもって現実化されるというのが実際のところであろう。そしてその目的や成果は、振り返って全体を見てみれば、決して付随的なものではなく、むしろそれらこそが主だったとさえ捉えられるのではなかろうか？ 授業の真の目的・成果は、実は授業それ自体ではないかもしれないのだ。

要するに、目的を限定し明確にした国際交流プロジェクトは、原理的に失敗せざるをえないということである。そのようなプロジェクトは、うわべだけ立派な、^{じつ}実のない空虚な事業に終わらざるをえないだろう。

無論、今回の事例だけからこのような結論が導きうるはずはない。これはいまだ単なる指摘、単なる示唆に過ぎない。にもかかわらず、今後量的にも質的にもますます進展し複雑なものとなるであろう国際交流を進める際には、このような無定型性は常に念頭に置かれるべき事実であるように、今回の経験から感じられるのである。

指摘すべき今一つは、異文化「理解」に積極的に隠された異文化「無理解」の可能性である。

今回例えば、時間論さえ論じる純粋哲学の研究者による授業さえ、経営系大学院の専門講義としておこなわれた。原理的・根源的な講義はせいぜいのところ経営倫理にとどまる我々の大学教育そして「実学」観を思い起こすと、この事実は、第1節で触れたグランドゼコールの実学教育、すなわち指導者として不可欠の倫理や原理・原則の教育を端的に示すものとして現れよう。であるがゆえにこの事実はまた、日本の我々自身の高等教育観、大学の授業というものに対する自明な感覚と照らし合わせる時、彼我の間に存する予想以上に深い亀裂を示

唆しているように思われるのだ。

確かに我々のはかつてに比べ「国際化」しつつある。「グローバル化」の波に吞まれ、「標準化」されつつある。この意味において、異国の文化をかつてよりも容易に理解しうるように・しているように一見、思われる。特殊、大学について言えば、例えば異なる国の異なる大学の授業をも、いや、大学でなくとも高等教育機関であればその授業をも、標準化されたシラバス表記や授業時間数を元に、相互に換算可能なものとなっている——実はそれぞれ個性的であるほかない授業の実態を見ることなく、形式的に……。

もちろん、我々は彼我の共通性・通約可能性のみを認識しているわけではない。差異もまた認識している。本稿でも報告されたような、例えばノートパソコンの利用といった設備面の違い、単位取得のための義務的出席回数といった制度面の違い等々、一目でわかる物質的ないし形式的な相違点は即座に把握され、まさしく本稿のような実地報告によって明らかにされうる。

しかし、そのさらに奥底に、そもそも高等教育というものの内実に対する理解に、深い相違があるように感じられるのだ。授業時間数や単位数といった形式的な共通性は、おそらく内実の共通性を意味してはいない。先に指摘した異文化交流の無定型性を認めるとすれば、なおさらそうとしか言いようがないだろう。この内実に形はないのだから。内実はむしろ形を逃れるのだから。この意味において、形式的共通性はむしろそのような内実の異質性を覆い隠す機能を果たしているようにさえ思われる。つまり、我々は、標準化の進む世界の中で、形式的共通性の形式的理解をもって異文化理解のすべて、とは言わないまでもその主要な部分であると捉えそこに安住することで、深層に存する異文化の異質性を見落としているのかもしれないのだ。我々は、形式の共通化・標準化による形式的な「理解」の進展とともに、表面的な共通性と表面的な違いに目を奪われ、実は次第に、その自覚さえ困難な深い「無理解」、いわば「無理解の無理解」を進めているのかもしれない。

一体、経営系大学院の専門講義に、わざわざ他国から哲学者を呼び、実学とし

てこれを講じさせ、学生に選択必修科目として提供することの、当該文化における意味は何なのだろうか。これを安易に、形式的に「理解」してはならないのだ。それは無理解への道なのだから。

言うまでもなくこの指摘も単なる示唆に過ぎない。今後こうした問いを、別の諸事例をも通じさらに具体的に追究してゆく予定である。